議題資料1－3

「第 2 回みえ県民意識調査」の結果へのコメント

白波瀬佐和子

三重県民の一人でも多くが「幸せを実感」することを目指す、というメッセージはわかりやすい。ただ、この幸福だと感じることの意味をどう捉えるかについては注意が必要である。

例えば、幸せだと感じることを政策目標に掲げることが、はたして妥当なのかという問題がある。8 ページ図 3-2「幸福感を判断する際に重視した事項」において、三重県民の多くは、家族関係や健康状況を回答している。家族関係や健康状態が良好であることが幸福だと感じる際の指標になっているとすると、そこに公的な政策をどう位置づけ、政策評価としてどう解釈するのかは慎重でなければならない。もちろん、家族や健康状態が公的な政策と無関係とは言えないのだが、家族と政策、個人の健康と政策との関係は単純ではない。極端なことをいえば、どのような政策が提供されようとも「幸せだ」と感じることは可能で、たとえ政策的に立ち遅れていてもそこは幸福実感が高いところとして評価されることになる。また、幸せだと感じる理由は、昔に比べて今は幸せ、周りに比べて幸せ、といったように「幸せと感じる」際の基準設定が様々であるので、その解釈も一様ではない。

したがって、意識調査を地域行政の評価として使用することはできるが、その解釈にあっては注意が必要であろう。

さらに分析を進める際、以下の 2 点を提案する。

1. 「図 3-6①女性就労に対する考え方」（15 ページ）について、全国調査に比べて、中断型の働き方を志向する者が多いことが指摘されているが、女性の学歴や年齢、配偶関係、子ども数等を配慮して全国データとの比較を行ってみてはどうだろうか。

2. 「③近所づきあい」（19 ページ）について、世帯類型別に近所づきあいの程度を比較検討するのも興味深いのではないか。そうすると、単身世帯の孤立が、近所づきあいの程度から推測できるだろう。